

シニアの休日 *in Rome* 半世紀を越えて味わう新鮮さ！

イタリア訪問を前に再度、映画を鑑賞した。1953年製作の「ローマの休日」。あれから半世紀あまり。DVDによる白黒の画面ながら、あの新鮮な感動と鑑賞後に残るほのぼのとした情感は変わっていない。アン王女を演ずるオードリー・ヘップバーンはあくまでキュートだし、新聞記者を演ずるグレゴリー・ペックもおおらかな人間愛がにじみ出ている。



その映画のロケ地をたどってみたいと名作「ロミオとジュリエット」「ベニス商人」の舞台を訪ねた最後にローマに足を踏み入れた。定年8年、初老男のイタリア初訪問。「シニアの休日 *in Rome*」である。



11月5日、フィレンツェからローマ入りした私たちは、バチカン宮殿を見学の後スペイン階段に着いた。すでに周囲は夕闇で覆われていたが階段は人で大にぎわい。外灯が記念写真を撮る人々の顔を照らしている。アイスクリームを食べていた王女と新聞記者が再開した石段の付近では恋人たちの抱擁とキスが絶えない。

翌6日は終日フリータイムだった。午前中にバチカン美術館、フォロ・ロマーノ、コロッセオを訪れた私は、午後「ローマの休日ツアー」に参加した。ミニバスはまず「真実の口」のある教会へ。入り口にある直径2メートルほどの円盤に海神トリトンの顔が刻まれ、大きな口が開いている。嘘つきは手を入れると抜けなくなる、との伝説がある。映画でも身分を隠しウソを言っている王女が、こわごわと手を入れ、引きずり込まれそうになるシーンが面白い。実は、円盤は古代ローマ時代のマンホールの蓋だったという。いつ、誰か知らないが、よくぞまあ、上手に伝説を創り上げたものだ！

引き続き、映画に出てくるいくつかの場所を訪れた。パンテオン、フォロ・ロマーノ、王女が入ったレストラン、新聞記者が住んでいたアパートとマルグッタ通り。多くの世界的な芸術家たちが住んでいたという小さな通りは、雨に濡れて水色に光り、街路樹は鮮やかな秋の色を映していた。

映画は、おとぎの国の夢物語だけれど、ロマンがあり愛がある。王宮の籠の中の鳥が飛び出し自由な市民の生活を体験——儀式に追われる王女の窮屈さが想像できるがゆえに、彼女の勇氣ある行動に誰もが共感、護衛から逃げるとききの応援さえしてあげたい気持ちになるだろう。

一方、グレゴリー・ペックの演技も、抑えが効いていてすばらしい。仕事やお金よりも(賭けで借金、家賃さえ滞っていた。もしこの大スクープを記事にすれば、莫大なお金が転がり込み、記者としての評価も上がったであろう)、最後の一线で王女を守ろうとしてすべて捨てた。ときどき見せる渋い表情がこの映画の品格と情趣を保っている。

たった1日だけの出会いだっただが、誰の目にも二人の間の愛が深まっていくのが見えた。王族に帰った王女の「もう戻らないことも出来たのです」との言葉の裏には「彼と一緒に」の思いまであっただろうことも推察できる。王女の髪をカットした床屋での仕草やその後パーティーでの再会、カメラマンのときにコミカルな演技・・・どれも上品な笑いとユーモアに満ちている。

安易なハッピーエンドとせず、記者とカメラマンの二人が信義をかけて王女を守った、というほろ苦い男の切なさ最後の記者会見の感動シーンが、なおさら鑑賞者の胸に残すのだろう。そんな想いを回想しながらの、シニアの「ローマの休日」だった。



今も残るアパートの表札



王女が新聞記者と再会したスペイン階段



ウソつきが手を入れたら出てこないという「真実の口」



パンテオン

右はマルグッタ通り

